

巻頭言

近年、心理学においても質的研究法の重要性が議論されてきている。なかでも、語り（ナラティブ）を用いた研究は、当事者の個別具体的な語りを捉え記述することを通じて、時間や空間、対話における生を捉えることができ、当事者自身の経験や社会との緊張関係のなかで立ち現れる人生のプロセスを描き出すことができるものとして注目されている。本誌『変容する語りを記述するための質的研究法—TEM and Narratives as Archives』（共同対人援助モデル研究・第6号）では、当事者の生を厚く記述しながらも、より汎用性の高い知見の蓄積とその応用を目指した2つの学会ワークショップを取り上げ、それぞれの研究を講演録の形式に整理した。ともに、2012年9月に専修大学（神奈川県）で開催された日本心理学会第76回大会にて実施されたワークショップである。これらの知見は、当事者の生に迫るあらゆる研究を、アーカイヴという視点から捉え直し、また、新しい分析方法を提案する試みとして、有用な枠組みを提供している。2つのワークショップの概要は次の通りである。

ワークショップ044「人間の発達変容をシステムとして捉える試み—TEMを用いて—」（企画：廣瀬真理子・長坂晟）では、人間の発達と人生径路の多様性と複雑性を時間とともに捉え描き出す質的研究法である複雑径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：TEM）によって、各事例における当事者の発達・変容プロセスを捉え、「システム」の観点から議論・検討する試みを行った。

人間は、常に外部と影響し合っている開放系、すなわちシステムとして捉えられる。個人システムは家族システムの影響を受け、家族システムは、何らかの集団やコミュニティや社会などさらに上位のシステムのなかに埋め込まれている。また、個人システムは、家族システムとは別の位相で、なんらかの集団システムに属してもいる。当企画では、人間を開放システムと捉えるシステム論（Bertalanffy, 1968/1973）に依拠する点、個人に経験された時間の流れを重視する点を特徴にもつ質的研究法TEMを用いて、人のライフ（生命・生活・人生）を「システムとしてどのように描くことができるか」に焦点をあてて、4名の話者提供より報告をいただいた。そして、TEMの方法論としての精緻化に関わってきた2名の指定討論者による指摘とまとめを踏まえ、議論を

行った。とりわけ、人の変容を「システム」として捉えることによって、どれほどの増分があり、どのようなことが見えてきたかを検討することに重きが置かれた。

ワークショップ013「ナラティブを媒介とした学際的研究」(企画：福田茉莉・日高友郎)では、福祉・法・医療の分野で研究する若手研究者に話題提供を依頼し、語り研究に従事してきた2名の指定討論者に議論してもらった。その際、話題提供者には、①各研究領域におけるナラティブ・データの重要性はどこにあるのか、②どのようにナラティブ・データを分析したのか(具体的な事例を含めた紹介)、という2つのポイントを含めた事例報告が実施された。指定討論者には、森岡正芳先生(神戸大学)と田垣正晋先生(大阪府立大学)を迎え、臨床領域における語り研究と質的研究法における語り研究の視点から、ナラティブを用いた研究について議論していただいた。これらの知見は、研究者と当事者の語りとの関係性の捉え方やナラティブの分析手法という課題に新たな知見を提供するだろう。また、コメントリには、ナラティブの可視化とアーカイブの重要性という視点から包括的に論考していただいた(滑田明暢)。

データ・アーカイブという発想は一般的であっても、研究におけるアーカイブという視点はあまり意識されていないのではないだろうか。しかし実際には、語りを捉え記述するということは、アーカイビングに通ずる営みである。また、こうした質的研究などの当事者の個別具体性を扱う研究におけるアーカイブの視点は、「主観」への批判的見解や分析方法の難しさもあいまって、より複雑で困難なものと捉えられがちである。しかし、いずれにせよ、本誌で述べられるそれぞれの研究は、人々の変容する語りや人生のプロセスを捉え記述することの重要性を議論すべきである、という研究者間の認識が合致して、ワークショップという場に集合し、結果的として、『共同対人援助モデル研究』として発刊されることを通して、意味あるまとまりへとなっている。本誌を通して、当事者の生に迫る研究、とりわけ時間、空間、対話のなかに立ち現れる人々の変容を記述する質的な手法が、知見やスキルとしてのみならず、研究に向き合う姿勢をかたちづくるような経験そのものとして、それぞれの研究者の研究を進めていくプロセスに促進的なサイン(記号)となって機能・貢献することを願っている。

(福田茉莉・安田裕子・サトウタツヤ)